委 員 会 管 内 視 察 報 告 書

■ 調査の期間　　平成３０年（2018 年）　１０月１７日（水）

■ 視察委員　　委 員 長　　花岡　ゆ た か
　　副委員長　　はまぐち　仁士
　　委　　員　　坂　上　　明
　　〃　　庄　本　けんじ
　　〃　　山　口　英　治
　　〃　　吉　井　竜　二
　　〃　　脇田　のりかず

■ 同行議員　　一　色　風　子

■ 調査先及び調査事項

西宮市立南甲子園小学校　　・英語教育について

■ 視察概要と質疑応答

・２０２０年から本格実施される小学生３・４年生からの外国語活動、小学生５・６年生からの外国語の教科化に向けて、南甲子園小学校では先進的な取組みを行っている。
・当校には英語の専科の教員がおり、この教員が月火水は南甲子園小学校で、木金は隣接の今津小学校で、外国語活動の授業を担っている。
・５年生の授業の様子を視察。
・授業の半分近くは英語で進行し、ＡＬ（アクティブ・ラーニング）を用いたゲーム感覚の授業で、英語を習うというよりは英語に親しむという感じの授業。
・「 What’s this ？ 」という問いに対して「 It’s a ～ 」または「 It’s an ～ 」で答えるクイズ形式で、絵を見て答えたり、中の見えない箱の中身を答える。
・「 What’s this ？ 」に於いては、「 What’s は日本語で〇〇ですよ 」というような教え方はしない。同様に「 a 」と「 an 」の使い分け等も説明はせず、使っているうちに覚えることを期待している。
・授業についていけていて楽しそうな児童がいると同時に、授業についていけず発言がほとんどない児童も散見された。

■ 感想・意見・西宮市当局に対する提言

花岡　ゆたか　委員長

・専科の教員（山崎先生）の発音が良かった。２０２０年の本格実施時に他の先生が皆、山崎先生のように英語が話せるようにはならないと考えられる。教員のスキルアップの必要性・重要性を大きく感じた。
・外国語活動に向けて、英語を習わせる親御さんの増加が予測されると同時に、授業がわかる児童、わからない児童の格差がより顕著になる不安がある。
・英語を身につけるには、ネイティブスピーカーもしくはそれに近い発音の英語に触れることが、必要不可欠だと考えられる。
・西宮市に於いては、ＡＬＴ・専科教員の確保のために充分な予算措置を取るべきである。

はまぐち　仁士　副委員長

●英語教育を進める上での教員体制として、担任・専科教諭・ＡＬＴ（ＡＥＴ）それぞれの役割を明確にし、どのような連携を図るべきかを検討すべきである。
●英語教育の効果検証をどのように実施していくのか、具体的な手法を検討すべきである。

坂上　明 委員

先ず、自分自身、「英語」が苦手であった当時を重ね合わせると、小学生に対する「英語の授業」について、「どうするんだろう？」と全く以って漠然としたものであったのが、実際にその風景を拝見させて頂き、英語に対し親しみやすく工夫された授業形態が把握でき、その明るい雰囲気の中で楽しそうに学習している子供達の今後に対し、心より期待したい。

只、質疑応答時にも挙げさせて頂いたが、「語学力」が市立学校間での、所謂「学校間格差」が生じる事の無き様、教育委員会に於かれては今後慎重に運んで頂きたい。

庄本　けんじ 委員

新学習指導要領が２０２０年より小学校で全面実施されることとなり、いわゆる英語教育が、小学校５・６年生で教科化され、授業時間数が年間７０時間、週２コマへ、外国語活動として行われる３・４年生での授業時間数が年間３５時間、週１コマとなる。

専門の教員、ＡＬＴなどの教員体制を大幅に強化することが迫られる。教員の多忙化が社会問題になっていて、その解決の展望が見えないなかで、新学習指導要領の全面実施へと移行しようとしていることに、危惧を抱かざるを得ない。

体制についての具体的な目標をしめすべきである。

南甲子園小学校での授業を拝見し感じたことは、慣れ親しむことを眼目に置いた授業内容のなかで、教科化された段階になって成績表をつけることになるが、どのように評価するか、そこにはなかなか困難があるのではないか。

山口　英治 委員

想像以上に素晴らしい授業をされていました。そのうえで当局にお願いいたします。

1、　高度になればなるほど、レベルに格差が生じます。本来の英語に慣れ親しむことを主眼におき、プログラムを組んでいただきたい。

2、　今後評価をどのようにしていくのかという問題において、国からの指標をもとに市としての基準も検討していただきたい。

3、　英語が育たない土壌として、日常生活の中で英語を使う機会に恵まれていないので、子ども達の交流の機会を作り、自然と英語に慣れ親しめるように努めて頂きたい。

4、　上記のほかに学校に常勤する外国人の英語教師を配置し、いつでも子ども達が英語に触れる環境を作っていただきたい。

5、　他の教科は読み取ることができれば、途中からでも学力がつくが、英語は、最初に躓くと学力をつけるのに大変困難な教科であることから、スタート時の導入が非常に大切である。そのため、楽しい授業を心がけて頂きたい。

吉井　竜二 委員

・授業については児童も楽しく英語を学んでいる様子が伺え、非常に好感がもてた。おそらくあのような雰囲気の中での授業であれば、英語に対する苦手意識や毛嫌いも軽減されるのではと考える。

非常に良い施策ではあるが、さすがに一人の先生となると学校間での格差や不公平と感じる保護者も一定存在するのではないかと考える。

良いものができていると感じるので、そういった先生を増やし、チームのようなものを組織し、英語教育を行う側の底上げを図っていただきたいと考える。

脇田　のりかず　委員

グローバル人材の素地を養う国際教育として、平成２９年より順次外国語活動を本格化していく中で、現在の当市における英語教育現場を今回見学することができて大変嬉しく思う。

今回は５年生の授業を見学したが、まず感じたことはクラス全体が明るく楽しく英語を学んでいるという点であった。

ビデオ教材を使いながら、クイズ大会やブラックボックス、クラスメイトと「背中の絵は何？」など、従来の教師からの一方的なインプット教育ではなく、生徒全員が「参加型」授業として取り組んでいる点は、コミュニケーション能力を磨くこともできる為、評価すべきものと考える。

授業終了後に生徒が書く Reflection sheet も自らが授業に対して振り返りをおこない、反省点や授業内容の計画を考えるきっかけとなるもので、大変良い取り組みである。

専科教員である山崎先生は、今津小学校と南甲子園小学校の２校を受け持っておられると

のことだったが、将来的には１学校ごとに専科教員を配置し、ＡＬＴとの連携強化、生徒との信頼関係をより深いものとすることが望ましいのではないかと思う。
今後外国語活動を本格化させていく中で、全生徒の語学力の底上げが基盤となることから、授業についていけない生徒へのフォロー体制（別途補講などの時間を設ける等）をしっかりと構築して、「苦手意識」の芽を早くから摘んでおかなければならない。
また同時に学校間格差を極力生まない体制構築も重要なポイントとして対策を講じて頂きたい。